人がそこでどう過ごすのか、活動するのか、その場所にどう応答していくのかを考える

赤松 佳珠子

Kazuko AKAMATSU

画一的な教育から自発的な教育へ、
変化する学校教育のニーズ、
教室の新デザインを提案。

流山市立おおたかの森小中学校

モノ作りは好きだったが 建築家を目指そうとは思っていなかった

わりと建築家の人は、子どものころから建築家を目指していた人が多いのですが、私はそうではありませんでした。子どもの頃は、糸ノコで作る工作や刺繍、フェルトの人形、紙粘土細工など、モノを作るのがすごく好きで、小学生のころは、将来、自分でモノを作ってお店をやる手芸屋さんになりたいと思っていました。中学生のころは、ブラスバンド部でクラリネットをやっていて、楽器にのめり込んでいました。

高校は日本女子大学の附属高校で、そのまま漠然と、大学では英文科に行くのかなと思っていました。ところが、高校二年生から三年生のときに、たまたま19世紀末のアールヌーヴォーについての本を何冊か読み始めて、アートや建築など、いろんなものが一体となってその時代を作り、世界に波及していくというのが、すごく面白いなと思いました。年に何回か担任の先生と面談して、進路希望を出すのですが、「赤松は英文科でいいんだな」と言われたとき、「いや、ちょっと違うかもしれない」と、三年生の最後のほうに言い出し、怒られました。

そして、日本女子大には住居学科というのがあるなと。住居なら模型を作ったり好きなモノ作りもあるし、美術や芸術とも関連があると思い、いきなり進路変更しました。ですから、日本女子大に住居学科がなかったらどうなっていたのかというくらい、建築家を目指していたわけではありませんでした。大学に入ってからも、友達の家に泊まり込んで建築模型などは作り込んでいましたが、そんなに、建築の設計でやっていけるとは思っていませんでしたし、何か建築に関連する仕事ができればと思っていたくらいです。

リベラルアーツ&サイエンスカレッジ

リベラルアーツ&サイエンスカレッジ

COM Vol.31

CONTENTS

Front Line ■ 建築家インタビュー 2
赤松 佳珠子
News Topics■ニュートピックス
フレキシブルパーク 収容車のサイズと重量がグレードアップ! 7
Arrangement ■ 納入事例 8
Okura House
Arrangement ■ 納入事例 10
小学館新社屋
Arrangement ■ 納入事例 12
日比谷ビルディング
Arrangement ■ 納入事例 13
ラティス青山スクエア
Arrangement ■ 納入事例 14
プライムメゾン代官山
Replace ■ リプレース事例 15
札幌あおばビル
Information ■ COMプレゼント 16

伊東豊雄氏に背中を押してもらい シーラカンスに入社

大学四年の前期に伊東豊雄先生、富永譲先生が非常勤の講師で来てくださっていて、その授業は絶対取ろうと思っていました。そして伊東先生、富永先生に設計を見てもらっているうちに、何か今までとは違うなと感じました。伊東先生から「本当に頭が固いな」、「建築というのはもっと楽しいんだぞ、もっと自由でいいんだ」と言われて、建築って、もっと自由でいいんだ、もっと面白いんだと四年生にして遅くも気づいたわけです。

流山市立おおたかの森小中学校

四年生は夏休み前に授業は終わるのですが、最後の講評は夏休み開けの９月です。そして、伊東先生から「本気でやりたいのだったら、見てやるから（模型を）事務所に持ってこい」と言われ、夏休み中に本当に持っていったら、「お前、本当に来たのか」と言われました。その場で伊東先生に言われたことをやって、また次の日も持っていったら「また来たのか」と言われました。そのやり取りの中で、自分が変わっていくという実感があり、そこで建築って面白いなと思い始めました。夏休み開けの講評会で、ほかの先生に「ずいぶん変わったね」と言われたのです。そういう意味では、伊東先生に建築の面白さを教えてもらったと思います。それがなければ、アトリエ系事務所で本気で設計に向き合う勇気は、なかったかもしれません。

その夏休みに、「シーラカンス（注／後にＣ＋Ａ、ＣＡｔへ改組）」にアルバイトに来ていたわけですが、人気があり就職希望の人も多かったので、最初はここに入りたいとなかなか言い出せませんでした。そんな時に、伊東先生から小嶋（注／昨年10月に急逝されたＣＡｔパートナーの建築家、小嶋一浩氏。「シーラカンス」を共同設立。日本建築学会賞など赤松氏と共同受賞多数）に「赤松はどうも一所懸命やりたいらしいぞ」と電話があり、「お前って就職希望だったっけ」という話になり、そこでまた伊東先生にお世話になってしまいました（笑）。

学生時代のオープンスクール 研究が学校の設計に活きる

私が「シーラカンス」に入った当時は、集合住宅などが多く、学校の設計経験がある事務所ではなかったんです。ちょうどそのころ、都市プランナーの蓑原敬さんに声を掛けていただき、幕張新都心の住宅地区のマスタープランの計画に、若手の事務所として「シーラカンス」がチームに加わりました。計画が進み、新しい住宅地の中の小学校のプロポーザル（企画提案による選定）が行われ、「シーラカンス」が選ばれました。私は偶然にも大学でオープンスクールを研究していましたので、さっそく手を挙げ、最初の段階から設計を担当し、現場にも常駐しました。そういった意味でも、「シーラカンス」が最初に手掛けた小学校である幕張新都心の打瀬小学校に関わることが出来たのは非常に大きな経験でした。本当に良いタイミングだったのだと思います。

流山市立おおたかの森小中学校

宇土市立宇土小学校

す。「打瀬」が終わったあと、岡山の吉備高原小学校の現場にチーフとして常駐、その後もいくつか学校の仕事がつながっていきました。

そして、磯崎新氏が、カタールのエデュケーション・シティという、非常に大きなマスタープランを手がけられていたのですが、その中の「リベラルアーツ&サイエンスカレッジ」をプロジェクトとして受けることになりました。

カタールは日本国内とは気候風土が違い非常に暑く、打ち合わせで行ったときには熱風が吹いてくるんです。そのような過酷な環境の中で、太陽光をコントロールしながら、どのように自然光を取り込むかなど、光の取り扱い方が大きなテーマになりました。

直射で入ってくると強すぎるので、それをどのように拡散光にしながら、明るさを使っていこうかと。そこで、壁との間１メートルのところにパネルを吊ってスペースを作り、そこに小さな窓から入ってきた光を反射させることで、自然光で内部を満たしています。また、パネルの外壁側は黄色に塗って光を反射させ、外壁シェードはイスラムの幾何学を使った永遠に同じパターンが続くという、アラベスク模様のモチーフを展開しています。同様にトップライトも幅をもたせることで光を拡散させて、中に取り込んでいます。

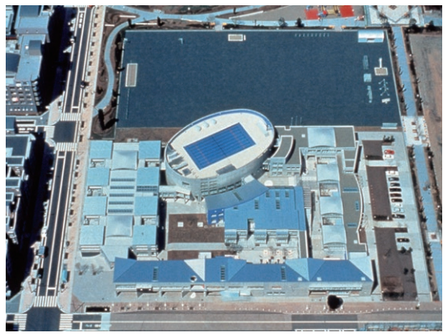
そのあともまた、磯崎氏に声をかけていただき、中央アジア３カ国、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタンにまたがる「ユニバーシティ・オブ・セントラルアジア」というプロジェクトで大学キャンパスの設計をすることになり、日本以外での仕事でも、良い経験を積むことができました。

新たな住宅地の中心となる新設の小・中併設校

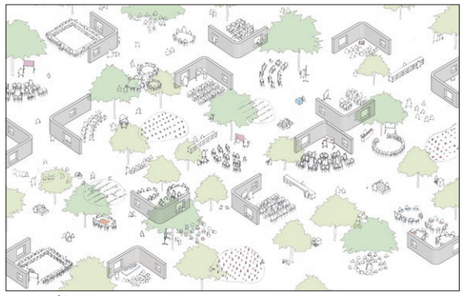
「流山市立おおたかの森小・中学校」では、流山市自体が子育て世代に対しての街づくりを推進していまして、新しくできる住宅地の中で、学校がキーになるという考えでした。プロポーザルでは小・中併設校だけでなく、地域施設も取り込み複合化することが求められました。

最近では小学校の冷房化も進みつつありますが、私達は、基本的には自然の通風・採光で気持ちの良い空間を実現させることを、常に考えています。そこで、まずその地域の風をどう取り込むかを考えます。「流山」の敷地は６月から９月は主に南北に風が吹き、対面する道路に正対させると風を遮ることになります。そこで風向きに対して素直に配置しようということと、住宅地に対して学校の建物が真正面に位置することを避けるため、敷地内に斜めに配置することにしました。また、地域の施設を街に対して開かれる場所に置き、地域の拠点にするという提案をしました。ただし、学校と地域の施設を完全に混在させてしまうと、セキュリティの問題が出てきますから、それをどう制御するのかも考えました。

打瀬小学校



教室の新たなスタイル「Lの壁」を考案する


コンセプトスケッチ

日本の学校は、戦後の高度経済成長期時代のハモニカ型といわれる、片廊下の学校が圧倒的に多いのです。短期間で沢山作る必要があった時代の標準設計ですが、建築としても効率的で、先生としても生徒40人に画一的な授業をするのにも効率的でした。しかし、今は、もう少し子どもたちの自発的な学びを誘発するべきという要請から、オープンスクール的な学校の設計が増えてきています。それも、単に教室と廊下の間の壁を取り去ったオープンスクールではなく、どんな授業や活動が展開されていくのかを考え、その活動に適した空間をどのように作っていくのかが重要です。

「おおたかの森小・中学校」の前に、「宇土小学校」を設計しましたが、オープンスクール的に作るには設定された面積が足りませんでした。そこでスタディを続ける中から、少し閉じつつ、つながるという「Lの壁」を見つけ出しました。そして、この「Lの壁」をもう少し展開・発展させたものが「おおたかの森小・中学校」の学校になります。廊下との壁を取っ払っただけの画一的なオープンスクールでもなく、いわゆる片廊下の学校でもない、という新しいスタイルを、わりと上手く作り出せたかなと思っています。

事務所としては、共にパートナーを務めていた小嶋が去年亡くなりまして、今後模索する部分はあると思うのですが、事務所自体がトップダウンではなく、スタッフ含め議論してやってきましたので、それは変わりません。人がそこでどう過ごすのか、活動するのか、その場所にどう応答していくのかを考えることがずっと根底にありましたし、人の行動を強制するのではなく許容する、そんな建築をこれからもつくっていきたいと思います。今までは、たまたま学校の設計が多いのですが、プログラムに特化するのではなく、学校以外の建築にも積極的に挑んでいきたいと考えています。

「怖い」という意識をなくす、さらなる安全設計を

機械式駐車場は何か怖いという感覚があるんです。操作しているときに怪我するんじゃないかとか、子どもがいたらすごく危ないんじゃないかという感覚がどうしてもありますので、さらに、センサーによる安全対策などを強化すれば、そのあたりの意識が変わってくるのかなという気がします。

また、以前、事務所スペースを借りていた建物で、何か音がするのに気づいたことがありまして、しばらくしてから機械式駐車場が動く音だとわかりました。これは建物側できちんと遮音すべき問題ですが、これも大事かと思います。

あと、中に入っているクルマが見えるタワー式の機械式駐車場を見たことがあるのですが、全部とは言いませんが一部でも、中を見せることをすると、面白いなと思ったりもしますね。

P R O F I L E

赤松 佳珠子 Kazuko AKAMATSU

1968年東京都生まれ。90年日本女子大学家政学部住居学科卒業後、シーラカンス(のちC+A、CAt)に加わる。2002年よりパートナー。現在、CAtパートナー、法政大学教授、神戸芸術工科大学非常勤講師。

主な作品
リベラルアーツ&サイエンスカレッジ、幕張インターナショナルスクール、柿畑のサンクン・ハウス、宇土市立宇土小学校、流山市立おおたかの森小中学校・おおたかの森センター・子ども図書館、アストラムライン新白島駅、ISAKインターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢、南方熊楠記念館新館。

主な受賞
日本建築学会賞(作品賞)、第26回村野藤吾賞、日本建築学会作品選奨、日本建築家協会賞、BCS賞、Global Holcim Awards Silver。

収容車のサイズと重量がグレードアップ!

フレキシブルパークに収容できる車の最大寸法・重量が、L型の大型サイズにも対応できるようになりました。
水平循環でパズル式ならではの最適な空間効率とコンパクト設計により、
格納できる車の収容台数を減らすことなく、収容力をよりグレードアップしたパーキングシステムを実現しました。

【収容可能車種】

ベンツ		ランドローバー	
GL63AMG	全長5,145㎜ 全幅1,980㎜ 重量2,620kg	ディスカバリーSE	全長4,850㎜ 全幅1,920㎜ 重量2,580kg
G350ブルーテック	全長4,530㎜ 全幅1,810㎜ 重量2,510kg	**キャデラック**	
G350ブルーテック 4MATIC	全長5,125㎜ 全幅1,935㎜ 重量2,540kg	ESCALADE	全長5,195㎜ 全幅2,065㎜ 重量2,650kg
S550マイバッハ4MATIC (左ハンドル)	全長5,460㎜ 全幅1,900㎜ 重量2,320kg		
S600マイバッハ(左ハンドル)	全長5,460㎜ 全幅1,900㎜ 重量2,350kg		
V220ｄアバンギャルドエクストラロング	全長5,380㎜ 全幅1,930㎜ 重量2,490kg		

注1:グレード、仕様等により、同一車種でも寸法・重量が異なる場合があります。
注2:ドアミラーをたためない又はドアミラーをたたんでも車全幅寸法内に収まらない、アンテナを収納できない又はアンテナを収納しても車全高寸法内に収まらない場合は入庫できない場合があります。